

東京・下北沢

小学生のころ、名古屋市内にある観音様の境内の近くに住んでいた。戦争が終わった後の空気が色濃く街は活気に満ち、それでも傷跡がそこかしこにかい問見られた。人間の生活の裏と表が入り組んで子どものころにも届いてきた。夕暮れどき路地を歩いたりすれば雑貨店の奥座敷で家族が食事を始めている様子がのぞけたりした。そんな記憶を持つ頃は、今、東京・世田谷の下北沢に住んでいる。事務所も本多劇場の隣の小さなビルの中にある。下北沢はいま再開発計画によって大きく変わろうとしている。反対と賛成の声が高まってきた。ぼくは感ずるところがあって、そのどちらにも寄っていないが、この下北沢という街のいまのあり方には大いに魅力があると思っている。そのひとつはこの街が路地の連続であって、迷路のように道が入り組んでいることだ。一部を除いて車は入ってこれない。街中でタクシーは拾えない。ここは戦前戦後の都市計画からはずれ、いわば自然発生的に今日まできた。不便で便利な街、自然なのに「非」自然の匂いに満ち満ちている街。いくつもの劇場が存在するが、街もまた劇場のように面白い。そこに登場する人々は主役と脇役を同時に務めている名優たちで、リアルであり、ファンタジーである。この街を変えたい人々、たとえば駅前に広場が欲しいと考えている人は火災や地震などのときの対策ができていないということを心配している。その通りだと思う。思うけれどもこの街はそれを乗り越えて個性的だ。これを壊せば、二度とこのリアルとファンタジーは生まれることはない。平穏でフラットで、風情のないどこにもある私鉄沿線の街に変わることは間違いないだろう。

人は何かを失わなければ何かを得られない。この下北沢にはあまりにも失ってはいけないものが多い。いま流行りの言葉を借りればスロー・ライフがある。人々は素顔を隠すことなくさらして歩いている。若きは若きのまま、老いたるは老いたるままそぞろ流れていく。ピアニストのフジ子・ヘミングさんを見かけることがあったが、彼女はまさに下北沢の優雅な魔女だった。先日、アメリカ西海岸に住む知人が遊びに来たとき、彼はばくりにいった。これは奇跡だ。これはペニスの街にも匹敵するよ、とも。えっ、とぼくは驚いたが、あながち見当はずれでもなさそうだったりもした。街はそこに登場する人を変える力を持っていることをあらためて感じた。

壊したくない「劇場」



あさい・しんべい
1937年愛知県瀬戸市生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。在学中は映画研究会に所属。1965年日本広告写真家協会賞受賞。1966年、写真集「ヒートルス東京」でメジャーデビューを果たす。写真にとどまらず、映画製作や文芸、音楽工芸などで活躍中。現在、大阪芸術大学大学院教授

東京世田谷区・下北沢の街には、過去と現在が微妙に混じり合い、さまざまな人々が路地を歩く